

★キラリ!★ 輝く人たち

公園と市民の暮らしをつなげる工夫をする専門職が「パークマスター」。この取り組みは平成11年1月に古河市で生まれました。初代パークマスターであり、今年4月に再任した菅さんにお話を伺いました。

日本初のパークマスター

幼少期を古河市で過ごし、御所沼復元など公園建設に尽力された中村良夫氏(東京工業大学名誉教授)は、「公園にはにぎわいが必要である」と考え、当時の古河市長との相談の中で「博物館の学芸員のように公園の活用を工夫し、市民の公園への思いを支援して、人々の出会いを促す役を担うパークマスター」を着想しました。

先生に師事する2人が、パークマスターと同補佐に就任したのは18年前のことです。平成16年に指定管理者制度がスタートすると、今では全国各地の公園で参考にされています。

公園に寄せる思いとの出会い

「市民にとって公園はどういう存在か」という学生時代からの菅さんの自問は、各地の参加型事業に従事する技術者となると「公園づくりで参加の価値はどのように発揮されるか」という課題になったそうです。

パークマスター着任当初の企画は、古民家での「名月なきむし大会」という夜に虫の声を聞く会、秋の葉っぱを組み合わせで六角形の雪の結晶をこしらえる「雪葉図説!」。どろんこ倶楽部、新茶まつり、ジェラテリア応援団、そして(公社)古河市シルバー人材センターの導入にも取り組みました。

「公園ならではの企画づくりに知恵を絞るのも楽しい! 古河には感性豊かで味わいのある人、そして公園を上手に使いこなす人たちが多く。こういった人たちとのやり取りが何よりもうれしい」と話してくれました。

「市民主役の公園づくりを」

すが ひろつぐ
菅 博嗣さん (57歳)



▲イベント参加時の菅さん(一番左)。神奈川県立三ツ池公園(横浜市)にて

市民が思考し主役となれる場所

「人と人をつなぐ、市民の生きがいとなる、健康寿命を延ばす……大切にしていきたいこと。里山、入会地、コモンズのように、みんな^{いりあいち}で育てていきたい。公園は、市民の思いが展開されると味わいが深まり日々の暮らしや人生を豊かにする場になっていく。そんなお手伝いをしたい」と語ってくれました。

平成15年から取り組んでいる「古河総合公園づくり円卓会議」では、公園の^{たたず}佇まい、営み、そして交流を大切に思う市民と行政が集い、アイデアを交換し相談をしながら、市民が自主的に運営する企画も話題にしています。思いのある人は、ぜひ公園までお問い合わせください。

色鮮やかな折々の季節、行き交う人と交わす言葉、気に入った場所に敷物をして書にふけることもできる……。菅さんと話をしているうちに、素敵な景色と爽やかな風を求めて足を運びたくなりました。



▲菅さんがお気に入りの公園内のベストショット
作品名：夏の中山台の流れ 撮影者：野中健司